

# トランプ大統領はなぜ 求められたのか？ その未来

講師：哲学者 内山 節

2017年3月7日(火) 18:00～20:00

高知共済会館



公益社団法人 高知県自治研究センター

# トランプ大統領はなぜ求められた？その未来

2017/3/7・高知

## 1. はじめに

—戦後の秩序が維持できなくなるなかで

## 2. 近代的理念＝自由・平等・友愛・民主主義と先進国の富の独占

—近代的理念は実現可能なものなのか、建前なのか

—建前を維持させた先進国の富の独占

—先進国の富の独占が崩れるなかで

## 3. 近代的な理念の崩壊とむき出しの利害の主張

—『コモンセンス』（トマス・ペイン）からトランプへ

—旧来の権利維持と国家主義

—途上国に追いつかれていくいらいだち、没落へのいらいだち

—これまでもつづいていた技術革新と労働の劣化

## 4. 黄昏れる国家（Web マガジン「現代ビジネス」にて連載中）

—国家が有効性を低下させていく時代と国家主義

—地域独立、地域の自治権強化を求めるの動き（スコットランド、カタロニア、沖縄……）

—システム依存型の生き方から、生きる世界の再創造へ

…地方への移住、農的生活、ローカリズム、従業員共同所有事業体

—コミュニティ＝共同体づくり、エコ・ヴィレッジ＝持続可能な地域づくりをめぐる「日韓協力会議」について

## 5. 近代的秩序の劣化と新しい動き

—分解していく世界をみつめながら

## 6. まとめに代えて

—「生きる場」をつくりなおす時代

# トランプ大統領はなぜ求められたのか？ その未来

2017年3月7日(火) 18時～20時

高知共済会館

哲学者 内山 節氏

(司会)

皆さん、こんにちは。

平日のしかも夕方の大変お忙しい時間帯に多くの皆さん、おい出いただきました大変ありがとうございます。定刻になりましたので、高知県自治研究センター主催の内山節先生によるセミナーを、ただいまより開催をしていきたいと思います。

私は本日の進行を務めさせていただきます自治研究センターの石川と申します。どうかよろしくお願いいたします。それで内山先生を実はお呼びするのは、今回で7回目になります。去年は「主権はだれのものか」というテーマでお話をいただいたわけですが、実は今日も空港から高知市内にご一緒させていただいていろんな話を聞か



せていただきました。今日の演題は「トランプ大統領はなぜ求められたのか？ その未来」ということで、大変個性的な大統領がこのたび誕生して約50日が経過をしました。トランプさんをめぐる状況がいろいろありますけれども、果たして4年間もつのかどうか？ というようなことも危ぶまれるようなそんな要素もあろうかと思いますが、しかし、トランプさんがもつのかどうかということよりも、何故ああいう人が誕生したのか、そしてそのことを含めて我々の世代は何処に向かおうとしているのかということが、より大事なそういったテーマでないかというふうに考えているところがあります。

これまで近代国家を支えてきた建前がどうも揺らいでいる、そういった中で近代国家そのものが終焉の時期を迎えようとしているのではないかと、そういうお話もさせていただきながら高知市内へ入ってきたところであります。今日は限られた時間ではありますが、表題に従って、今から内山先生に約90分お話をいただきます。そのあと質疑の時間も若干とりたいと思いますから、どうかよろしくをお願いをしたいと思います。それでは内山先生よろしくお願いたします

(内山氏)

ご紹介いただきました内山です。

今、おっしゃられた通りでどうも何が起きるのか分からない時代に入ってきた感じがします。レジュメ通りではないんですけど、僕自身はトランプ当選あるかなという気はしていたんです。ただ

僕はアメリカ研究が専門ではありませんので、マスコミ等の世論調査だと、全てトランプ当選は無いという話だったので「やっぱりそうかなあ」と思いながらも「ひょっとしたらあるかな」という気がしました。その理由というのは、実は世界の歴史を変えた3冊の本と言われている本の中に

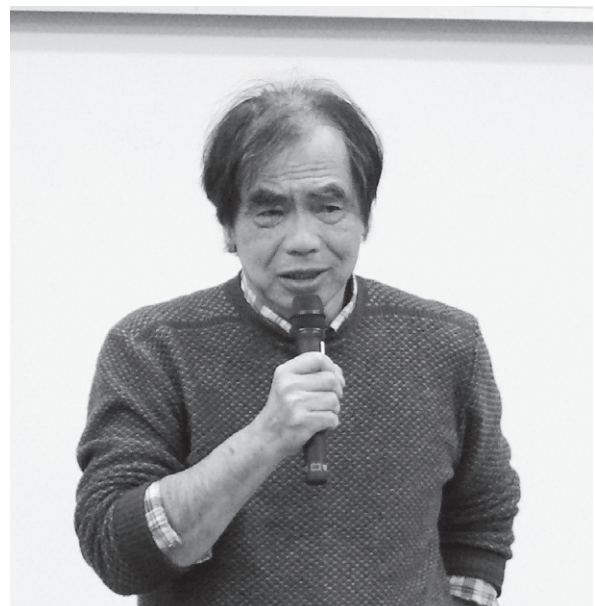
『コモンセンス』というトマス・ペインが書いた本があるんです。これはアメリカの独立戦争の時に出たんですけど、東部の13州がイギリスに対して独立戦争を始めた時に当初アメリカ独立軍は負けっぱなしになっていて、それには理由があってイギリスは正規の軍隊が来た。しかし、アメリカの方は農民たちの寄せ集めの軍隊でしたし、イギリス軍は海軍を持っていた。アメリカはまだ海軍を持ってない。だから、開戦と同時に田舎も全部占領されて、正規軍対農民軍の戦いみたいになりましたから、イギリスが一方向的に勝ちまくるといって当初そんな感じでした。その時にトマス・ペインという人は、この『コモンセンス』という本を出した。この本自体はアジテーションみたいな本で「勝てる」というそのことを意志・気持ちを鼓舞していくような内容の本です。

この本は当時たちまちベストセラーになりました。人々の気持ちが「よし、やるぞ」みたいになっていって、イギリス軍のドジもあったんだけど逆転しました。で、アメリカの独立ということになっていったきっかけをつくった本とも言われています。ただ、この本を読んで思うことは、普通独立のことを訴える本には、何か理念が書いてあるものなんです。例えば、世界はこうなればいけないとか、植民地自体が不当であるとか、あるいはこういう理念を実現するために独立するんだとか、何かそういう話が普通は書いてある。ところがこの本にはそれが何にもないんです。じゃあ、何が書いてあったかというと、イギリスから独立したほうが儲かるという本なんです。つまり当時独立に反対するアメリカ人もいたわけで、その人達の危惧というのはイギリスから独立したら、当時イギリスの植民地ですから貿易の最大相手国はイギリスだったわけで、だから、それが断絶してしまったら儲からなくなるというふうに思った人達が独立に反対していた。それに対してトマス・ペインは「大丈夫だ」と。イギリスとも縁が切れたら、フランスとかオランダなんかがちまちまち貿易の相手としてやって来ると。当時オランダは強国ですから。そういう状況になっていけばイギリスもいつか断絶的になっても、たちまち貿易をやろうと言って来るに決まっている。だ

から、イギリスから独立しても儲かるから大丈夫だという説得の本なわけです。

僕自身は読んでいて実に珍しい本だなって感じがします。独立の大義が儲かるという話だっという国も珍しい。それはさっき言ったように独立する時って、何か崇高な理念のようなものが後の時代になればその理念に誤りがあったとか言われるかもしれませんが、その時代の中では何かそういうものが書き込まれるはず。だけどアメリカはむしろ儲かるという話で独立したといいますが、説得されたという、そういう国だということなんです。そうすると、今回の選挙の時に儲かる話をどっちがやっていたかという圧倒的にトランプなわけです。つまりトランプが当選すれば、実際にそうなるかどうかは別問題として不法移民とか追放する。そうしたらアメリカの下層階級の人達は儲かるような気がするのです。もう一つは大幅な減税を言っていたので、大幅な減税をしてくれれば、実は上の人達も大いに儲かるわけです。ですから、そこに隠れトランプが発生するはずなんです。さらに言えば企業的大幅な減税とか、公共事業を増やしていく等々の話。そういうことをしてくれれば別に建設業関係の人じゃなくても、国の中でお金が回り始めればそこで何らかの投資をしたりして儲かるチャンスが現れると考えた人も当然いたはずなんです。

だからトランプという人は、はっきり言うと





「私が当選すれば皆さん儲かりますよ」というメニューをちゃんと出していた。それが本当に儲かるかどうかは別問題で、下の方の人はますます切り捨てられてしまう可能性もあるんだけど、とりあえず選挙戦ではそういうことを言っていたということです。それに対してじゃあクリントン候補の場合は、そのことについて何か言っていたかと言うと、実は何にも言っていない。「私が当選したら今までのままですよ」って言ってるわけです。もちろん少しは良くなるとか言っていたんですけど、基本的には今までのままだと。だからトランプの方は儲かるという提案をして、クリントンの方は今までのままという基本的にはそういう提案です。そうするとやっぱりこれは隠れトランプ的な人が出てきてトランプに票がいくんじゃないかという気持ちを実は持っていたということなんです。別に分析をしてそう思ったということじゃなくて、今の雰囲気だと儲かる提案をしている勢力が、相当票を取るのではないかという気がして、終わって見たらトランプ当選なんで「やっぱりそうか」という気がしたということです。

ただ、そういうことも含めまして今の時代というのは、戦後の世界が作ってきたいろんな秩序が

もう維持できなくなっている。それが今の状況でそうすると新しい秩序作りが始まっていくわけで、その新しい秩序を作っていくという過程では当然いろんな混乱も発生する。その混乱の中でトランプ的な人が大統領になるということも起きるし、どうなるか分かりませんが、5月にフランスの大統領選挙がある。今のフランスの世論調査では第1回目の投票ではルペンが第1位になるだろうと思われていて、最近世論調査は当たらないので本当にどこまで信用していいのか分からないんですけど、そういう雰囲気です。フランスの世論調査ではフランスの場合には第1回で過半数を取る候補がいなかった場合には、1位、2位の決選投票になりますので、決選投票で2位候補が誰であれ勝つのではないかというのが今の予想ですけど、よく分かりません。そういうことが起きるかもしれないということです。

## 戦後的秩序が 維持できなくなるなかで

一方でEUというヨーロッパ共同体は、僕自身は崩壊していこうと思っていて時間の問題だ



と思います。早く崩壊するか、もう少し時間をかけた後に崩壊するかという違いはあってもという気がします。EU 自体が何で持たないと思っているかという、やはりいろんな国が一緒になってやっていこうということですから、それであるのなら政策的な合理性がないと上手くいかないかなと。ところが、最初に OECD（経済協力開発機構）ヨーロッパの石炭鉄鋼共同体を作った頃というのは、ある種合理的な政策判断みたいなのがあって作っていったんですけど、EU になってユーロという通貨を作ったりしていく過程では、むしろそういうことよりもヨーロッパ的情念の方が勝ったって感じなんです。どういうことかと言うと、やっぱりヨーロッパというのは世界の中心はヨーロッパであったという気持ちを持っている人が多い。ところが気がついてみると、ヨーロッパは世界の中心ではなくなって、何か少し地盤が沈下、低下してきたといいますか、その場合でもアメリカが世界の中心であった間というのは、アメリカもヨーロッパから移った人達が軸になった社会ですから、まだ我慢ができたのかと。

それから後、アメリカに対してはヨーロッパの人達は結構ばかにもしているわけで、経済的、軍事的には力を持っているけれども大した文化が無いとか、そんなふうな気持ちをまだ持っている。だから、いろんな意味でアメリカがヨーロッパを抜いているという感じの時には我慢が出来たといいますか。ところがその後、日本が力を付けてきたり、いろんな国が力を付け始めて、それでそのことに対してやっぱり我慢ならないという、そういう雰囲気というのがあって、何とかしてヨーロッパがもう一度世界の中心に戻りたいと。一時期、西ヨーロッパ全部を足した GDP と日本の GDP が同じぐらいという時代もあったんです。ですから、そういうことに我慢ならなくなってきた。だから、一致団結して、もう一度ヨーロッパが世界の中心になりたいという、むしろそういうヨーロッパ的情念で EU ができていたという経緯があるので、やっぱりこれはちょっと無理があるといえますか。これから、むしろいろんなほころびの方が出てくるだろうという気がしています。

ですから、そういう点でも戦後作ったいろんな秩序が維持できなくなっていくしと。また、これもご承知のようにイギリスも、もう一度スコットランドの独立問題が浮上してくる可能性は十分にあるし、スコットランドが独立することになると、真っ先にくるのは多分北アイルランドで、独立するという話になってきそうだし。そこまでくると今度はウェールズ独立というのも可能性が出てきている。そうするとイギリスはイングランドだけという感じになっていくわけで、4つに分解するか、4つで終わるかどうかわからない。もっと小さい所ができてくる可能性があるわけです。僕の友人の友人だから赤の他人なんですけど、2年ぐらい前にスコットランドに行って、町の大衆食堂みたいな所に入って料理を頼んだ。そうしたらおばさんが料理を持ってきながら、「ここ好き？」って聞いた。彼は迂闊にも「イングランドは大好きだ」と言ってしまった。その瞬間におばさんは、「そんな人に食べさせる食事はない」と持って帰っちゃった。「さっさと帰れ」と言われた。イギリスというのはそんな状況ですから、いつまた火が噴いてくるかわかりません。そうなってくると、今度はスペインでもカタロニアの独立問題が当然出てくるし、バスク独立という問題が出てくるしと、そんな話がほこほこヨーロッパでは出てくる。

結局そういう中で片方では国家主義的な政党が力を付けたり、そういう時代がまた発生していくんだろうという気がします。だから、あらゆる意味で私たちは一つの秩序の崩壊域に入ってきた。それがいろんな混乱を引き起こすと思っておけばいいんだろうという気がします。では、戦後の秩序を崩壊させた一番の原因は何だったのかということになってくると、途上国・新興国の台頭が何よりも大きい気がします。どういうことかと言うと、1970年代に入った頃までだと、先進国から見ると世界の富は全て先進国に流れ込んで来るといってそういう世界を作っていたんです。ですからあの頃の資源というのはただ同然に近くて、今、例えば石油は正確にはわかりませんが多分1バレル54ドルとかです。そのあたりで多分、今取引されていると思います。1970年頃ですと1バレル1ドルぐらい。ですから本当に水よりも安い石油

という感じだった。それが1974年だったか第一次オイルショックがきて、それで一遍に12ドル、13ドルぐらいまで上がった。その後また順次上がって行って、今は多分54ドルとかそんなものだと思います。1年ぐらい前ですと120ドルくらいという時もあったわけです。

## 先進国の富の独占が崩れる中で

結局、先進国はただ同然で資源も持つてくることができなくなった。そこらあたりが一つ先進国の富の独占が終わった。つまり産油国に富が流れ込むというそういう時代を作ったということ。さらに1980年代以降になってくると、世界のいろいろな国で工業化が進んできている。それは市場を巡る大競争時代に突入をしたというふうに言ってもよかった。だから、そういう中で、もう今や先進国が世界の富を独り占めするという、そういう時代ではなくなってしまっているわけです。そうすると、その時にこういう現象っていうのは、一方では悪くないという言い方もできると。やっぱり世界の富を先進国が独占していくなんていうのは、明らかに不平等な世界があるということですから、いろいろな国が力を付けてきて富が分散していく。それは考え方としては悪くない。しかしそれは先進国にとってみると非常に辛い時代を作ることになった。

何故かという先進国は世界の富を独占していることを当然のこととするような仕組みを作りあげたということなんです。ところが、独占できなくなっていくわけですから、いろいろなことが上手くいかなくなってくる。それは今、世界中そうなんですけども先進国ではどこでも格差が広がって格差社会化していくとか、あるいは社会保障レベルなんかも何処の国でも切り下げという話になってきている。ヨーロッパの場合ですと、今、国によって違うけれど順次年金の支給年齢なんかも上がってきていて、最終的には70歳支給になるんじゃないかとよく言われるといますか。つまり、それぐらいまでもっていかないと年金制度がもたなくなっちゃうわけです。向こうですと定年

になると皆さん喜んで仕事をリタイヤしている。その後は、老後というのか、余暇というのか、生活を楽しむというのか、人生を楽しむというのか、そういう生活が向こうの人達の望みというふうに言われたんですけど。最近では定年後どうやって働いたらいいかを考える人達が結構多くなっていて、だから高齢者を雇う会社なんていうのが出てきたり、そういうのも考え方の変化というだけじゃなくて、現実問題として60歳で定年を迎えてのんびりした人生を送るなんていうのは、段々できなくなってきているというふうに思った方がいいということなんです。

だから、本当にどこの国に行っても、増税の話や社会保障が悪くなっていくっていう話があって、一方では格差社会が広がっていている。そういう中で先進国の人間達の中からある種の苛立ちとか、強い力を使って元に戻してくれという、本来からいうと、もうできない話なんですけども、強い政治家達が出てくれば、その辺の問題を解決してくれるのではないかという一種の願望みたいなものが出てくる。実際そこで国家主義的な政党になってくると、私達が政権を取れば、まず移民とか外国人労働者とかそういう人たちを追放していく、それでまさに自国第一の国を作ることができるというキャンペーンをしているわけで、そこになびいていく人達っていうのは結構な数字でいるというのが今の状況というふうに思ってもよいってことです。

## ヨーロッパにおける 自由・平等・友愛

ただ、その時にもう一つ考えておかなければいけないことは、例えばフランスだと、町中を歩いていると色々な壁なんかにか書かれている「自由・平等・友愛」という言葉で、この「自由・平等・友愛」というのは近代における理念として、世界化した。ただ実際には「自由・平等・友愛」というのは、日本人が受け止めているほど気楽な言葉ではなかったんです。どういうことかと言うと、ヨーロッパにおける近代的な考え方は、実は



中世にあった考え方を改良したのが多いんです。そうするとヨーロッパの中世の社会においては、キリスト教徒の「自由・平等・友愛」は存在していた。つまり、それは決して今私達が言うような平等なキリスト教の社会があったわけじゃないんだけど、神の下での平等とか。だから実際の生活の中では中世ヨーロッパですから、不平等極まりない社会があるわけです。でも神の下では人間はみな平等であるし、神が与えた自由がクリスチャンの人達には全員に与えられているという、そういう考え方らしい。それからクリスチャン同士が友愛的なその結びつきをもって助け合っていくと。

だから日本で民主党政権ができた時に最初の総理大臣をやった鳩山由紀夫という人は友愛というのが大好きだったらしくて、友愛社会とか盛んに言った。だけど若干あれは間違っているんですね。それは彼が言う友愛社会を作りたいという考えはいいのだけど、ヨーロッパが主張した友愛というのは仲間内の友愛なんです。元々クリスチャンだけに与えられた友愛なんです。近代になってくると、宗教と政治とか社会理念は分離させるということが原則になります。だから、キリスト教徒だけにある友愛という考え方はやめることになった。だけど、やっぱりその時代にヨーロッパ的文明を共有する人達の友愛であるという、そのことは実は変わってないわけで、イスラム教徒まで含めた友愛ではないし、あるいはアジアの人達を含めた友愛ではない。自由というのも、今はクリスチャンの自由という考え方ではないけれど、あくまでヨーロッパ的な理念を共有する人達の自由だし、あるいはそういう理念を共有する人達の平等というかなり制限付きといいますか、仲間内だけに認められた「自由・平等・友愛」という一面を、ヨーロッパの基本的な考え方は持っていた。

だから近代の歴史というのは、そういう制限を少しずつ崩していく歴史ではあったんですけど、にも関わらずやっぱり元からあった考え方は受け継がれているわけです。例えば、フランスにおけるイスラム教徒達なんかもそうですけど、女性達がスカーフみたいなものをして学校へ行くことが禁止とかです。日本だったら仮にイスラム教徒の人

がいても別に誰も文句言わないと思うんだけど、つまり、フランス的理念を共有しない人達には自由も平等も友愛も無いという、絶えずそういう形でイスラム教徒が迫害されるという、そういう社会でもあるのです。ですから、根底的にはフランスなんかは「自由・平等・友愛」ってまさにその理念を出した国なんですけど、中々ややこしい国。僕自身は日本と比較してフランスを使ってきたので、多分30回ぐらい行ったんじゃないかという感じがします。

ある年に行きましたら、日本の仏像の百済観音くだらかんのんがフランスで展示されるという、それがえらい大きなニュースになっていました。何故かという、これはもちろん日本の国宝ですけど、それをフランスへ持って行って、ルーブル美術館で展示しようという話になった。それに対してルーブル美術館の当時の館長が拒否したんです。シラク大統領の時代ですから、10年ぐらい前です。何故ルーブルは拒否するのかというと、その時の館長は記者会見で「日本のような国にルーブルにふさわしい美術は無い」と話した。それで向こうでは日本を好きな人も沢山いますから相当な問題になっていて、最後は「ルーブルに置け」と大統領命令を出してルーブルで展示して、実際には凄い人気で毎日が「押すな、押すな」になったんですけど。館長のおかげで盛り上がったということでもあったんです。ですから結構本音はそういう人達がい





たりするわけです。中々ややこしい国です。

しかし、ヨーロッパ社会ってというのは、そういう一面を持っているということなんです。ですから、これも本当に昔は困ったんです。例えば、ドイツに行くと夕方ドイツ人がよくソーセージを食べながらビールを飲んでいるお店なんかに行くと、酔っぱらうと日本人だと分かるとうすぐに「こないだはイタリアを入れたのがまずかったと、今度はイタリア抜きでやろうぜ」とかいう冗談を言われて「そうしよう」ってわけにもいかないんですね。実にどう答えたらいいのか困る。酔っ払いの戯言みたいなものでもあるんですけど。そういうことがよくあった。しかし、今はドイツにいてそんな冗談は聞こえない。それはそういうことを反省したわけではなくて、「日本ごときがついてこなくて結構です」、「今度はドイツ単独でやります」という、つまりドイツの自信というやつなんです。東西ドイツを統一してから以降はドイツの自信というのは凄いものがあるって、だから僕なんかが行くと「何か嫌な雰囲気だな」と。別に右翼政党が出てこなくても普通の保守政党だったり、あるいは普通の社会民主党、まあドイツの場合にはそうなんですけど。社会民主党だったりするところが実は非常に右傾化していてそういう雰囲気、ドイツナンバーワン主義みたいなのが何気なく出てくるっていいですか。だから「何となく嫌な感じだなあ」ということなんですけど。そういうような例えが出てきたり。そこら辺に実は一つの本音があるというふうに言ってもよい。

## 近代的理念は実現可能なもの なのか、建前なのか

そこでただ「自由・平等・友愛」というスローガンの理念はフランス革命の時に出てきたものだし。それから今私達が言っている民主主義というのは、むしろイギリスが作ってきたものというふうに言ってもよくて、そういった近代の理念というものが、かつて人々はまだ完全には実現していないけれども、最終的には実現できるものという捉え方をしているのが普通だった。しかしこの

辺りも20世紀後半になってくると結構いろんな議論があって、実は実現不能なのではないかという考え方をする人達がだんだん増えてきている。だから不完全な自由は有りうる。だけど完全な自由なんか何処にもないじゃないか。さらに言えば不完全な平等はあるかもしれないけれど、本当に人々を平等にする社会なんていうのは、実は何処にも発生したことがないし、これからも不可能ではないか。あるいはこの民主主義というのも、何処の国でも実際の議会なんていうものは多数派の横暴みたいなものであって、少数派の意見を尊重しながらとかよく言うんだけれど、そんなものは小学校の学級の討論ぐらいのもので、その時だったらクラスメート30人ぐらいでみんなで議論して、みんなが一番上手くいくように決めるとか、それぐらいできるかもしれませんが、実際の政治の世界ではそんなもん何処でも実現していない。

これは、まだ十分に実現してる、してないということじゃなくて根本的に実現しないのではないかというふうに思う人達っていうのが20世紀の後半になるとじわじわ増えてきた。ただそこから、いわばリベラルな立場を取る人達はどういう考え方を取ったかというところ、だけれどもこの旗を降ろしてはいけない。つまり実現することはないかもしれないけれども、自由とか平等とか友愛とか民主主義っていうのは、旗を立て続けることに意味がある。旗を立て続けることによって、それが後退していくことを止める。それから一歩でもいいから前に行くという、それが大事なんだという、そういう立場を取ってきた。だからそれはある意味では今の日本の憲法9条みたいなもので、はっきり言っちゃえば憲法9条があったって自衛隊は存在しているし、結構日本は軍事力持っている。PKOとかスーダンに行ったりもしているし、もし北朝鮮との間がおかしくなってくれば、自衛隊が北朝鮮を攻撃するなんてことも絶対無いとは言えないし、実際にはそんなもののわけです。

だけどじゃあ、憲法9条もどうせ実態は無いようなものなのだから、もう無くてもいいんじゃないかと。実態は本当にそんなもんなわけです。あれがあったってこんな状態ですから、無くたって同じみたいな状況だけど、やっぱり9条は必要

だと言って旗を持ち続ける。そのことによって少しでも後退を食い止めるとか、あるいは少しでも、やっぱり平和ってことを目指して前に向かうとか、それが重要という、それに近いもの。つまり自由とか平等とか民主主義っていうのはそんなもんで、旗を立て続けることで後退を防ぎ少しでも前に行かせるという、それが大事なんだという捉え方をする人達の方が20世紀の終わりぐらいになってくると、むしろ多数派になってきたという感じなんです。

その点では、近代の理念というのは建前であったということをおぼろげに認めたということです。だから実現するものではなく建前にすぎない。だけどこの建前は手放しちゃいけないという、そういう立場を取るようになってきたということです。しかし、それもまたいわば先進国の余裕が生んだものとも言えるわけで、つまり先進国がさっき言ったように世界の富を独占していた。それが故にある程度先進国の人達に余裕があった。そういう余裕の中で建前を維持させたことも言える。

## 途上国に追いつかれていく いらだち、没落へのいらだち

ところが今の状況は、その余裕がなくなってきてしまった。そうすると、自分たちの利害をむき出しで主張するようになってきた。そうすると場合によっては自由なんかよりも金が欲しいという、そういう話だが出てくるし。それからまた、建前としての平等を維持し続けようとするよりも、「あいつらを追放しろ」とかそういう話の方が表に出てくるといって、そんな時代に今突入し始めたと思ってもいいような気がします。

つまりここにあるものは根底的にはやっぱり途上国に追いつかれていく苛立ちだし、それからまた自分達が没落していくってことへの苛立ちだし、さらにもう一つ言ってしまうと、ちょっと話が違うようなんですけど、今から30年ぐらい前に、ある方に連れられて饅頭会社を見に行っただけです。和菓子屋さんです。その会社は、その後経営危機になったんですけど、一時いろんな所に支店

を造って全国展開をした和菓子屋さんだったんです。その和菓子さんの工場を見に行ったら和菓子ですから、餡<sup>あん</sup>にくるんだ物ができてくるわけですけど、もしこの仕事をするんだったら一番面白いのは、饅頭を作る部分のみといますか。自分で工夫をしたり、あるいは手でいろんなことをやったりとか、そこら辺りは職人芸で、いわば一番面白い部分といますか。ところがその部分は完全に自動化されているのです。だから、見ていると本当にロボットがウチをするという感じですね。機械がシュッと下がるとまるでウチするみたいな感じでポコッと和菓子が出てくるわけです。それがベルトコンベアで動き始めると次の所で紙に包まれる。それが最後になってくると、完全なオートメーションになっているのかというところではなくて、その後で箱に詰められたお菓子を大きなダンボール一つに30個とか30箱とか詰めていきますから、そこら辺の工程は人間の仕事です。さらにそのダンボールをトラックに持って行くのも人間の仕事なわけです。だから、一番その仕事で面白い部分が完全に機械化されていて、つまらないとは言わないんだけど、一番単純な部分が人間の労働として残っている。だから、これがやっぱり今オートメーション化された工場っていう現実なのかと、その時見ながら思ったことがありました。

その方向というのは今ではもっともっと進んできているわけで、いろんな所で産業用ロボットが動いたりしながら物作りが進んでいく。じゃあ人間達は仕事をしなくてよかったのか。そんなことはない。実は完全に自動化された工場でも床を掃除しているのは人間という、そういう現実なわけです。だから、そういうことを伴いながらいわば下層の労働者達の没落が進んでいく。ですから、アメリカなんかにおける下層の労働者達、これはヨーロッパでも同じですけど、その人たちの不満っていうのは自分たちの雇用が不安定だとか、賃金が安いってというような問題と同時に自分たちの労働がそういうところに追いやられている。だから、そういう日々を過ごしているが故の苛立ちがあるってことなんです。だから今の状況というのはドイツでもそうだけど、ドイツの職人制度があ

って、マイスター制度とか言われるものです。その人たちが非常に尊重される社会っていうふうに言われてきたんだけど、僕から見ると「ちょっと昔の話じゃないですか」っていう感じがする。確かにマイスター制度はしっかりあるわけです。だけどマイスターがやるような仕事が実は機械化されている。その機械の下請けみたいな感じに段々マイスターがなくなって、そういう傾向っていうのはやっぱりあるわけで、ですから、そういう変化もまた同時に進行していて、これは多分これからもっともっと進行していくだろう。つまりAI化とか人工知能とかそういう話が出てくると、多分そういうことになっていくだろうという気がしてきます。

## AIにはない人間らしさを楽しむ

結局そうなってくると、私達人間達の労働というのはどうあるべきなのかとか、私達はどんなふうに暮らしていくべきなのかとか、いろんなことを考え直さないといけないという感じがする。2ヵ月ぐらい前のある所で、話をしていたんですけど、そこには中小企業の経営者が多かった。そういうところでも今、人工知能とかそういうものはかなり入り始めているので、またそれを開発している中小企業もある。そこのある社長さんから、「今のこういう動きをどういうふうに考えたらよいか、実はうちもその開発やってるんだけど」とそんな感じです。僕は多分私達の考え方が変わっていくのではないかと。というのは、例えば、将棋なんかやっていく時にプロの棋士より将棋のソフトの方が強いなんて話がもう出始めている。これはもっともっと完璧なプログラムを組めば恐らく人間は太刀打ちできなくなる。

どうして人間が太刀打ちできなくなるかというと、人間は失敗するからです。つまり、どんなにプロのトップの将棋指しでも、何でこんなことやっちゃったのというような失敗をやるわけです。その失敗があるからいいんだけど、将棋の面白いところは、対局でやっている、どっちも強いわけです。そうすると、片方がドジをして本当に

変な指し方をしちゃったと。そうすると相手側からすれば「しめた」ってことになるんですけど、「しめた」っていう場面に到達すると相手側はまたそれを上回るドジをやったりする。これがやっぱり人間がやっている将棋なわけです。だから、むしろそのことを楽しむ時代といえますか。だから完璧に勝つだけだったらコンピューターの方が強い。コンピューターが強いけれどコンピューターの将棋は面白くない。つまり失敗がない。それに対して人間の方はどんなに強くても失敗する。その人間らしさを楽しんでいく、むしろそういう見かたに変わっていかざるをえない。

多分スポーツなんかの捉え方なんかでも、スポーツ選手に対していままでは完璧性を求めてきた。だけど、段々そうじゃなくなってって、こんな選手がこんなことするんだという、むしろそのこと。例えば、野球なんかそうですけど、凄い日本のトップクラスのピッチャーが、なんたる球を投げたんだっていう球を投げたりして、ホームランを打たれたりするわけです。あるいはホームランを打って下さいというような球を投げてしまったら、バッターの方はその瞬間に肩に力が入って、それを打ち損なってしまうとか、そういう人間らしさを楽しんでいくっていうことに、段々移行する可能性がある。だから、なんか人間が完璧なロボットのような仕事をするっていうことを求めた時代からです。やっぱり人間って何だったんだろうかという、その部分を楽しんでいくような変化っていうのが起きる可能性があるっていいですか。

つまり、今って技術的にもそういう転換期にきてるといふふうに言ってもよい。だけど、社会がそれに対応できてるかという、全くできてないわけです。ですから完璧な仕事をロボットにやらせて、人間は床を掃除しているみたいな、そういう時代を作っていて、しかもそこに非正規雇用の人達が大量に雇われてしまうということも、近代が作ったシステムは実は限界にきている。だけど、その限界を上手に超えていくようなことが一切なされていないという、その問題というのを一つは考えておかなければいけないだろうという気がします。



## 黄昏れる国家

実はレジュメに『黄昏れる国家』って書いたんですけど、これは講談社が「現代ビジネス」という Web マガジンを出していて、そこに知り合いがいて、以前から「何か連載してよ」と言われていたんですけど、僕の方が中々連載テーマが思いつかなくて「そのうち、そのうち」とか言ってたんです。ある時『黄昏れる国家』っていうのをやってみようかという気がして、それで去年（2016年）の10月か11月くらいから始めました。もしパソコン使う方でしたら現代ビジネス・内山節と検索してもらくと、多分出てくると思います。Web マガジンですからバックナンバーも読めます。ちょうどトランプの選挙とかいろいろありましたので、ここでは割に現実的な世の中の動きを見ながら書いています。ただ、『黄昏れる国家』という題を付けたのは、近代における国家の仕組みみたいなものが、やっぱりそろそろもたなくなってきた。だからそこでさっき言ったように、イギリスとかヨーロッパでは地域独立の動きが出てくるでしょうし、日本でも沖縄に行けば、独立の動きは今よりももっともって強くなってくるだろうという気がします。一番最近の琉球誌、新報です。あそこがやった世論調査だと、独立すべきっていうのを支持するって人と、半独立みたいな感じで日本と連邦制を組む、だから完全独立するんです。それから独立するんだけど連邦制を組むという意見と、独立はしないけれど特別州として高度な自治を要求するという、その三つの支持率の合計が38%です。ですから、かなり独立っていうことが具体的な話になってきたという感じがします。

それは理由としてはもう言うまでもないけれども、今の普天間から辺野古の問題でも、結局沖縄に自治が無いというそういう現実というのが、ここまであからさまになっているし、さらに沖縄の場合にはかつては、「とは言ったって基地収入で生きてるんでしょ」って話があったけど、今、沖縄経済における基地収入のウエイトはもう5%切っているんです。圧倒的に観光と流通なんです。



ですから、那覇空港を拠点とする東アジア一帯の流通拠点のそういう仕事と観光。実際には沖縄の観光はちょっと危ういところがあるんだけど。何かやりすぎっていう感じで長期的にもつのかな？という心配がないではないんですけど。ただもう既に、沖縄経済において基地が必要だっていう意見はわずかな問題になってきた。むしろ基地を撤去してそこを流通拠点にしたり、観光拠点でもいいですけど、そういうふうにした方が絶対に沖縄にはいいという、そういう現実がもう生まれているってこともある。だから多分沖縄では独立問題というのが、これからはもっともって出てくるだろうという気がします。

それは独立まではいかないのだけれども、最近雰囲気が違うなあと思っているのは、日本でも東北の方に行くと、まだ冗談のレベルなんだけど、「また東北列藩同盟を復活させようぜ」って話が飲み屋的には聞こえるようになってきた。もちろんまだ本気の話ではない。ここは坂本龍馬で有名な場所ですから、東北列藩同盟っていうわけにもいかないんでしょうけど。この間も結構本気になって、そこにいた人達が東北列藩同盟をまた復活させて、沖縄と連携しようという、東北同盟と沖縄はいわゆる藩がないですから列藩同盟ではないけれど。だから、去年の参議院選の後に東北に行ってみると、「佐竹は裏切ったけど、東北は全勝だ」と、こういう意見があったりする。佐竹というのは秋田のことなんですけれど、実は幕末の時に東北列藩同盟を裏切ったのが佐竹です。佐竹藩なんです。東北に行くと秋田と言うんじゃなくて

佐竹って言い方があって、それが佐竹の裏切りという話になっていくんです。また佐竹はという話は、秋田だけは自民党が勝ちましたので。そんなこともだから冗談半分の話であるんだけど、参議院選の後には東北に行くと、「東北は秋田以外は全勝だ」という、それは結構、皆さんプライドを持って言っていました。

ですから、段々東北の人達もやっぱり東北っていうのは歴史的に、社会的なインフラの整備が遅れているとか、いろんなことがあったので、国に依存してちょっとでもお金を回してもらおうみたいな時代が続いたんですけど、最近はもうそんなもんいいよっていう雰囲気、むしろそれよりも東北としての自立を考える。そういうのが何かジワジワと出てきたなという感じがあったりする。だから、東北の場合には独立しようという話ではないんだけど、何となく日本の戦後的秩序が段々狂い始めているという感じだし、そういうことが世界中で起きてきているという感じです。だけどその一方において、世界は大変厳しい方向だけに向かっているのかと言うと、必ずしもそういうことでもない。

## ソウル首都圏と東京の類似点

実は去年の5月にシンポジウムがあって、ソウルに行って講演をしてきました。一体なんの講演をしてきたのかと言うと、韓国という国は日本以上で、全人口の50%強をソウル首都圏に集めちゃった。だから、政治経済の全てがソウルにあるという状況を作っちゃって、ソウル特別市の周りのソウル郊外を含めてなんですけど、そこに半分強の人達が集まっている。結局、今の東京とかの状況に似ているのを作っちゃったわけで、みんなして必死になってマンションを買ったりして暮らしているって形になるんですけど、結局地域社会は存在しないし、バラバラになっちゃってる。

しかも日本以上に激しい競争社会です。ですから受験というのは大変な状況です。韓国の大学入試で、パトカーで送るというニュースを日本でもよく見ます。実はあんな状況ですから学校に行か

なくなった子供達って沢山存在するわけです。つまり、子供の時からあおって競争させていくので、当然ながらもそれに付いて行くのが嫌って言う子供も出てきます。日本的に言うと不登校の子供が、当然ながら出てくる。さらに今度は親の中にも今の教育システムでは嫌だっていう親も出てくるわけです。ですから、もう学校に行かなくていいと言っている親も出てくる。だから行ったんだけど嫌になった子供と、行かしたくない親という、その二つの不登校の数もまた結構甚大になっているわけです。

その結果どうしているかという、フリースクールがいっぱいできていて、そのフリースクールは塾みたいなものですけど、そこにそういう子供達は通っている。だからソウルなんかでもフリースクールがいっぱいあるわけです。このフリースクールの方は結構いい教育をしていて、郊外なんかですと、狭くてもいいから農園を持ったりしながら、地元の昔からの人が来て農業を教えたり、地元のことを教えたり、そんなこともしながらいわゆる勉強の方もつないでやっている。そんな感じで、教育の仕方としてはかなりいいフリースクールが多いという感じです。ただそういう子供達が沢山増えたもんだから、実は小学校中退とか全然行ってないとか、そういうのが出てきちゃうわけです。そうなる国も段々困ってくるわけです。ですから小学校から卒業資格制試験制度を導入して、小学校の卒業資格試験に合格した人が小学校卒。中学校も同じで中学卒業資格試験に合格した人が中卒。ただし一般的な学校に行った場合にはそれを免除するという、だから受けなくても自然に資格・合格という形になるわけです。

これは何のためにやっているかという、フリースクールに行った子供達というのは救済手段なんです。だから、そっち側の人達は資格試験を受けて下さい。ただ資格試験のレベルを国がもの凄く下げているので、大体みんな受かりますよみたいな感じにしている。それで小学校中退とかを免れている。そんなふうに変えているということなんです。だから、そういう中でやっぱり向こうの課題もコミュニティーをどう作るのかとか、人間達がどういうふうに関わりあうのかと

か、そういう課題が軸になってきた。それからもう一つは、ソウルに半分の人を集めちゃったってことは、地方はまたガタガタになっているわけです。ですから地方小都市の没落もあるし、農山村地域の没落もあるし、今度は農山村地域をどう立て直すかと。そうするとやっぱり農山村の共同体をどういうふうにもう一度復活させていくのかとか、残っているものがあるんだったら、それをどう守っていくのかとか、そういうことが課題になっている。さらに言えばそういう中で、日本と同じで農山村に移住してくる若者達っていうのもまた存在するわけです。だから、状況は極めて日本と似ているといいますか、さっき言った小学校の卒業資格までは無いにしても本当にいろんな点が似ています。

## コミュニティの在り方

1965年に日韓条約が結ばれて、その時払われた賠償金を基にして経済再建をやったという感じですから、1965年頃が日本で言う明治20年代くらいの八幡製鉄所ができた頃で、そんな感じなわけです。それがあつという間にいわば先進国の仲間入りというところまで持っていったので、やっぱりそこはいろんな無理があるし、いろんな歪がある。だから、合理的と言えば合理的だけど、日本の場合でも昔は人が亡くなれば、家でお葬式

という人がほとんどだった。それが最近では葬儀場でやる人の方が多いかなという感じに変わってきた。韓国のお葬式はどこでやっているかという病院が葬儀場を持っているんです。だから病院があつて玄関の横は葬儀場になっていて、合理的と言えば一番合理的で亡くなったらあそこへ入るといって霊柩車も何にもいらなくて、だから病院の横の建物で韓国のお葬式の「泣き女」という仕事もあるくらい派手にワアワア泣くのが供養になるっていうのがある。だから、ワアワア泣いている横を歩いて病院に行って診察を受けるみたいな感じになるので、ちょっと日本じゃ無理かなという感じがするんだけど、一番便利と言ってしまうと一番便利だという言い方もできないではないわけです。

だからそんなようなことも、あつという間にそういう社会を作っちゃったといいますか。そういう中において、やっぱり人間達がどんなふうにもコミュニティを作ったらいいかとか、共同体の在り方はどうあつたらいいのかとか、そういうことが鍵。またそういう活動をしている人たちもいっぱいいます。そういう人達とそれを支援している研究者と、そこと提携しようと思っている自治体の職員さんとか、そういう人達が向こうで実行委員会を作って、それで気がついたら日本も同じような問題を抱えている。だからお互いに協力し合って長期的にお互いの成果を出し合ったり、議論をし合ったりしながら、これからのコミュニティ





一の在り方を考えていくという、そういう場を作れないかという、そういう申し出が<sup>おとし</sup>一昨年ぐらいに僕のところにあって、僕の方は「それは面白そうだから是非やりましょう」という話です。

## エコ・ヴィレッジ ＝持続可能な地域づくり をめぐる「日韓協力会議」

第1回目のシンポジウムをソウルで、第2回目はついこの間、富山県でやったんです。韓国の南の方で、日本でいうと市と県の間ぐらいの大きさがあって感じがするんだけど、それくらいの農山村地域で、真ん中に結構まあまあの町がある。そこがエコ・ヴィレッジ作りっていうのを一生懸命やっている。エコ・ヴィレッジと言うとただのエコって思いやすいんだけど、実際には持続可能な地域を作るということなんです。持続可能な地域を作るからこそ自然と対立しない社会の在り方を考える。だから、太陽光で発電したらエコ・ヴィレッジになるわけではない。その地域を持続可能にしていく時に太陽光も使いましょうとか、それは構わないんですけど。そうすると、単に自然エネルギーを使うだけじゃなくて、その地域の農業はどうあったらいいのかとか、山の管理はどうあったらいいのかとか、それからそもそも人間達がそこでどんな結び合いをやって、どんな共同体を作

っていったらいいのかとか、そういうことを全部含めてエコ・ヴィレッジといいます。そういうことを一生懸命やろうとしている地域があって、そういうことをやっている日本のどこかと「協力し合ってできないか？」と言うので、富山県の南砺市が規模的に似ているので、そこで南砺市も今言ったような意味でのエコ・ヴィレッジ作りっていうのをこの間やってきているわけです。

タムヤン郡という所なんですけど、タムヤン郡と南砺市で協力関係を結びながらいくというのがいいんじゃないだろうかというわけです。この間、南砺市の方でシンポジウムをやったわけです。ただタムヤン郡も相当気合いが入っていて30数人もきたんです。随分沢山きたなっていう感じなんですけど。実はこの辺が韓国でも切実な問題になっています。ですから私達としても変なつまらない対立をやっているよりは、やっぱりこれからの社会が同じような方向性で、そこでお互いの成果を出し合って協力し合うという、その方がずっと面白いと言うので、多分まだしばらく持続していこうという感じです。

そういうふうな意味で、今世界は片方ではさっき言ったように先進国の富の独占が難しくなって、その中でいろんな苛立ちが起きて、強い政治家に回復してもらおうみたいな人達も登場してくるし、また、それをあおる人達も出てくる。片方ではそういう全く警戒しないとやばいなあというような、そういう雰囲気というのは展開していくんだけど、



実はもう一つ社会の奥の方では、今、日韓の協力関係って話で言ったように、同じような課題を抱えながらこれからの社会をもう一度作り直そうという動きもまた存在しているというのが今の状況です。そういう絡みの中で地域の独立とか、自治権の拡大とか、そういうようなことを求める動きもまた登場してくる。

## 国の必然性はあるのか

国っていうのを考えた時に、国というのは何らかの必然性があったのかということになると、僕は必然性はないって感じがします。つまり、誰かが作っちゃったというだけなんです。つまり例えば、日本の場合で言えば、かつて卑弥呼の邪馬台国があったかどうかは別にして、いわば豪族地域社会みたいなのがあったんでしょう。ただ日本という国を作ろうという話が出てきたのは600年代くらいの話で、ちょうど律令制りつりょうせいができていた頃。あの頃に国としての日本を作るという動きが出てきた。だけどそれは別にそれを作らなきゃいけないわけじゃないわけで、国を作ろうとした人達がいたという、いわばただそれだけの話なわけです。

実際例えば、台湾という国を見ていると台湾っていうのは、清王朝、昔の「シン」じゃなくて、この間の「シン」といいますか。日清戦争をやった清です。清王朝が台湾を併合するまでは、台湾って独立国なんです。だから中国かってのも困った問題です。そんなこと言ったら中国にカミナリ落とされますけども。清が併合する前は独立台湾と言うんです。じゃあ独立台湾国があったかという国は無いんです。つまり、30いくつの部族があって、その部族達がそれぞれの場所で暮らしていて、その部族達が何となく協調しながら存在しているんです。だから国を持たない部族社会ってというような感じでずうっと続いてきた。それが清王朝の時に中国に併合されて、中国の福建省から沢山人が送り込まれて、それが中国系台湾人みたいな感じになっていく。その後日本が入ってきて台湾を併合した。だから台湾に行くと今でもそう

ですけど、非常に親日的な人が多い。その理由というのは、元々中国が併合して次に日本が併合してみたいな、その歴史が両方ともそんなに長くない。少なくとも中国として2千年続いたとか、そんな話ではないわけで、だから、親日的な人が多いらしいと。

また戦後になると蒋介石軍が大陸を追われて入ってきて、その人達が元からいた人達を離島市民扱いしたもんだから、それへの反感なんかもあって、だから、蒋介石の時代と比べれば日本の統治時代の方がよかったなんていう話が高齢者からは出てくる。別にそれは台湾のことはともかくとして、国家が無ければ存在できないというわけではないということです。だから誰かが台湾国を作ろうとしなかった以上は、別に無くてもやっていけたということになる。それが日本の場合には600年代に入ったぐらいから、日本という国を作ろうとする人達が現れた。その人たちが日本国を作った。当時の日本国が別に青森まで日本国のわけじゃないんだけど、北地方を中心とするような日本を作ろうとしたということです。だから必然性があったわけではなくて作られてしまった。ところが作ってしまうと国があることを前提としたシステムができあがる。そうするとそこに人々が巻き込まれていく。そうすると国が無い生き方というのは考えられなくなってくるわけです。だから今、税金の納税の時期ですけども、時にはそういうこともやりながら、いろんな国の制度ができている。そうすると国が無くなってしまおうと言われると、そういうことが想定できないということにはなるわけですけど、これは必要だったからではなくて、実際にできてしまったという事実が積み上げられてしまった。僕らもその事実巻き込まれてなければ生きていくことができないという、だから、今の生き方としては、国も有るしかないという言い方ができるわけです。

## 日本における「国の必然性」

そもそも国なんていうものに、できなければいけない必然性は無かったというふうに考えてもいい

いといいますか。その時に国を作った人達は、結局、力で国を作ったわけですけど、力があるから国を作って自分が大王になったっていうのは調子悪いわけで、何故かという、力で大王になっただけだったならば自分達の力が落ちてきた時には滅ばされてもいいってことになっちゃうわけで、実際そういう歴史なんです。ただ権力を握った人達は、自分達はある種の必然性がある、それであるべくしてなったというふうな言い方をしたいわけです。だから、正当な理由があって大王・国王になったんだというふうに言いたいということです。

じゃあ、律令制ができた時にはそのために何をやったかということですけど、歴史書の編纂<sup>へんさん</sup>だったわけです。古事記・日本書紀というのは、今、残っている一番古い物で、実際にはその前から何遍かあったらしいんですけど、集大成が古事記日本史として残っている。じゃあ、古事記日本史はどういう内容になっているかということになると、結局、この日本というのは元々は、島も無ければ海も無いコーラルが溜まっているような状態。だから、陸も無いし何も無い。ただ混沌としている。そこにイザナギ・イザナミという二人の神様が現れて、その二人の神様が最初に創った島が淡路島だと書いてあります。淡路島を創り、それから四国も創ったとか書いてありますが、そんなふうにして、日本列島を創ったと。北海道は創っていませんので、やっぱり北海道は日本じゃなかったんだなという感じがしますが。それから風の神を創ったとか水の神を創ったとか書いてあって、今、私達が見ているような日本を神様が創ったと。そのイザナギ・イザナミの子供なのか、イザナギだけの子供なのか、よく分からない子供あまてらすおおみかみの一人に天照大神にぎのひことというのがいて、その天照の孫の邇邇にぎのひこと芸命というのが天孫降臨をして地上に降り立った。その3代先か何かが神武天皇ということになっていて、だから、歴史学的には神武は存在しない天皇。後で作られた神話ということです。一応その本では確か3代後に神武が現れて、それが初代天皇で天皇はその子孫にあたると。つまり、自分達の先祖が作ったのが日本で、自分はその日本を作った先祖の子孫。だからその先

祖の子孫たる私が日本を統一する。それが日本にとっては一番正当性があるんだということを言いたくて古事記・日本書紀を作ったというのが理由の一つということです。その神話を作ったことによって、みんなが「そうだなあ」と思ったかどうかは分かりませんが、だけど、恐らくそれ以外には説得する方法はなかったということだと思えます。その後になってくると古代社会だって、藤原関係が軸になる社会に移るし、さらにその後は武士の時代に移っていくわけですけど、結局その場合でも実権を握った実質的な大王であるそれが、自分達が治めてよいという正当性を上手く作れないわけです。だから結局そこでどうしたかということ、やっぱり日本の大王は天皇で、その天皇から統治権を委託されたという、そういう形を取る。だから江戸期になりますと委託政権論というのが確立するんだけど、大王たる天皇がいれば統治能力を失っている、それで家臣である幕府というか徳川家に対して代わりに政権をやってくれと言ったんだというわけです。だからそこにしかな自分達の正当性を主張できなかったということでもあったわけです。

だから、かつての国というのは、こういう歴史を見ていってもできてくる必然性がない。国の政権にもできてくる必然性が当然ない。そういう中で随分苦労したんですねっていう感じがする。実はこの政権としては、この苦労から自由になることができたのは、普通選挙法が施工されてからな





んです。普通選挙法が施行されてしまうと、例えば、今で言えば安倍という人が何で日本の大王でいいのかと。だって皆さんが選んだでしょって話になるわけで、私が中心ですってことを説明する必要がなくなったということです。だから、一面で言うと選挙制度ができて、自分達が支配権を持っていることの理由を説明しなくてもいい時代を作ったという点では、実は一面のヤバさを持っているわけです。だからといってまた將軍様になればいいというわけではないんだけど。つまりそれぐらいに国っていうものは、実は矛盾だらけということです。

## 国の矛盾

だから、それは明治になっても同じことが起きたわけで、明治になってくると慶応3年ですけど王政復古の号令というのを出して、それでその後、明治維新へと向かっていく。その時に、王政復古の復古ってどの時代に返ろうとしたのかということなんですけど、実は日本のある時の人達が目指したのは神話の時代なんです。つまり神武天皇の頃です。つまり天孫降臨をした人の子孫が国を治めるといって、それが日本にとってもっとも合理的であるというその形にもっていきこうとした。しかも、そのためには神の子孫ですから、神でなければいけないわけで、だから天皇は現人神あらひとがみだったわけです。その天皇の先祖の創った国を治めているわけですから、主権は国民にはないわけで、主権・大権は天皇にあるという形をとった。だから、ある意味では存在しない神話の時代に返ろうとしたというような、明治の王政復古の復古の意味だったわけです。

ところが、一方において明治維新を迎えなければいけなかった理由というのは、黒船が来たりして、ともかく日本が早く近代化をして軍事力を付けていかないと、えらいことになるというのが明治維新を生み出した一つの理由だったわけで、だから明治維新以降の日本の歴史というのは近代国家を作ることになった。だから片方では近代国家を作りながら、片方では神代かみよの時代に戻ると言っ

ているわけですから、そこにはやっぱりどう考えても矛盾があるわけです。上手く統一なんかできるはずがないといえますか。結局その結果どうなったかという、段々と天皇の実質的な権限を縮小するという方向にいかざるをえなかった。だから、憲法上も法律上も天皇が大権を持っている、天皇は無制限の決定権を持っているということなんだけど、実際にはそれは段々と行使できないものになっていたわけで、むしろ政治家達とか軍部とかそういうところが実権を持って、という形になっていった。だからその点でいうと、途中から象徴天皇制に変わっていたわけです。憲法上は大権を持っているけど、実質的な機能としては日本国民統合の象徴みたいな、そういうものに段々移行していった。だから戦後の象徴天皇制というのは決して民主化の成果ではなくて、GHQの意向なんかもあったんだけど、むしろ戦前の後半の天皇制の在り方をきちっと位置づけたというふうに言ってもいい。だから、「政治とは切り離しますよ」って形にして、国民統合の象徴というよく分からない象徴にしたというわけです。

しかし、国民統合の象徴って何をやる人ですかと言うと、またこれが不明確なわけです。ただそのところは明確にははずいわけ、不明確に我々の象徴でいくしかない。その不明確さを補うために天皇自身は象徴としての役割というのを一生懸命こなす。行動を通してみんなに象徴として信頼してもらおうという、そういう形になったわけです。だから今の天皇は本当に何かあれば直ぐにいくというような、そういう活動をよくすることなわけです。ところがそうやってくると、その活動ができなくなってきたらヤバイということで、そろそろ退位させて下さいなんて話になっちゃったわけです。だけど、この辺りも含めて実は象徴天皇とはどういう天皇なのかというのは、実はハッキリしない。ただ天皇の行動によって信頼を得るといって、それしか手口が無いわけです。だからこの辺りも実は矛盾だらけです。それは戦前の天皇制も矛盾だらけなわけです。歴史上一貫して矛盾だらけと言ってもいいわけで、だから、国とかそういうものの在り方というのは、実は元からたそがれてると言ってもいい。ところが、

たそがれが表面化しなかったのは、さっき言ったように先進国では富の独占があった。その金の力である程度の社会保障制度を作ったり、その国の企業が儲かっていくわけですから、そこで賃金が上がっていくとかいろんなことがあって、何となくこの国でいいじゃないかというような、そんな雰囲気です。その問題点が表面化しないという、そういう時代が続いただけ。

ところが今、その問題点が表面化し始めた時代に移ってきたということです。そういう中で冒頭からお話しているように、トランプの当選なんかもあるし、それから建前を守り続けることにくたびれちゃった人達というのが沢山いて、「そんなことよりも俺の収入を増やしてくれ」っていう人達も大量に出てくるし。だから本当にいろんなことが起きてくるんだなという感じがします。そういうふうな意味で、今、世界はいろんな形でこれから分解していくでしょう。その世界の分解というのは、国の中から地域が独立するというような意味の分解もあるし、独立しないまでも大きな自治権を要求していくという分解もある。だけどその一方において苛立っていく人達も発生するし、そういう中で自分たちでコミュニティー作りをやっていこうとか、高知だとソーシャル・ビジネス的なことをやっていこうとか、そういう人達も沢山出てくる。いろんな意味での分解がこれから進んでいくという気がしています。

## 「人の幸せ＝自分の幸せ」の気付き

先月、島根県に行ったんですけど、そこで地元の高校生と話し合いをするという設定になっていて、そういうことをせざるをえなかった。ところが高校生ですからそろそろ大学の進学とか、あるいは進学しないってことも含めてそろそろ決めていかなきゃいけない。そうすると将来なにをやりたいとか、そういうことを考えていかなきゃいけない。そこで高校生達と話をしている「将来なにをやりたいの？」と聞いたら、こういう言い方は失礼なんですけども、そこは山の中の高校でいわゆる偏差値的にはそんなに高くないので、東大に行

きたいとか京大に行きたいとかいう生徒はいないわけです。そういう中で生徒さん達の中で多かったのは、理学療法士とか看護師とか、それからシェフもいました。どうしてそれをやりたいのかという話聞くと、僕の周りにいた20人ぐらいの高校生、全員そうなんですけど、人の役に立つ仕事がしたいなど。その高校生が考えている人の役に立つ仕事が看護師だったり、理学療法士だったり、しかもできたら地元に戻ってきたいと言ったわけです。そうすると、看護師だったら地元に戻ってきて仕事がある可能性があるし。料理人、シェフになりたいという高校生も、地元に戻ってきておいしい料理を出せるようなレストランを開きたい。それで地元の人達を楽しくさせてあげたいと。地元の人達が楽しくやってくれればそれを作った自分も楽しくなるというそういう話です。

だから、人が幸せになれば自分も幸せになる。人の役に立つとはそういうことで自分だけで秘かに、例えばトレーダーみたいなことをやってお金を儲ける、これ幸せにならないということも、もう人々は気が付き始めていて、本当に自分が看護師でも何でもいいんだけどやって、それで患者さんが良くなっていく、あるいは感謝してくれる、そうすると私も幸せになるみたいな、そういう仕事をやりたいという、そこのとこだけは全員が一致してるので、この学校は特殊学校なのか、それとも今そういう傾向なのかと思ったんです。ただ実際には全員というのは凄いと思ったけれども、今、そんな雰囲気が広がってきていることは確かなんです。

僕は群馬県の上野村に家があって、東京にいたり上野村にいたりという生活なんです。上野村って人口1,300人の山奥の村です。この村でももう2年近く前ですけど、中学生の意識調査をやってびっくりしたのは、将来どこで暮らしたいかという質問項目に対して、全員が上野村って答えている。つまり、東京に行ったら駒のように使われるだけの人間になってしまう。だけど上野村にいたら、いろんな結び合いがあって、自分が頑張れば地域も良くなる。そういう中で自分も楽しいしみみたいな、そういう生き方ができるというのが、うちの村でも中学生の中に広がっていて、けど結

果を見た時には、「本当に東京で暮らしたいって一人もいないの」という気がしましたけど。中学生30人ぐらいですけど。全員そういう答えをしていた。

だから世の中は実は奥の方では随分変わってきているんです。東日本大震災の後でも、今は土木工事型復興とそれから人間達の生きる世界をもう一度つくろうという復興です。その二つの復興が多少ずれながら進んでいるという感じです。役所がやっているのは土木工事型の復興という感じで、それに対して人々がやっているのは、もう一度我々の生きる世界を取り返そうみたいな。そこではどういうふうに通みューニティーを作っているのかとか、そういうことが課題になっていくし、それからまたそこで、ある程度の収入とかができてこない、生きていくことができないわけで、だけどその収入の在り方も単に儲けようじゃなくて、どういうふうに通みューニティーをつながりながら、みんなに分ち合えるような経済を作るかという、今の言葉を使うとソーシャル・ビジネス型の経済を作ろうという動きがいっぱいある。

## 生きる世界の再建

今の時代というのはそういうふうないろんな意味で分解が進んでいる。だから僕自身は決して警戒はしているけど悲観もしてないわけで、面白くなる可能性みたいなものを今の時代は沢山秘めている。それはフランスなどでもそうなんですけど、

ローカルな生きる世界の再建みたいなことを目指す勢力というのは、相当大きな力を持っていて決してトランプのフランスばかりではないといひますか。だから、前々回か何かにフランスにいた時に大統領選をやってたんです。その時に意外な結果があったっていうのは、フランスの中の極左勢力の候補がいて、銀行員の感じのいいおばさんではありましたが。けどあの人は選挙戦を通して二つのことしか言わなかった。それは資本主義は打倒されなければいけないということ。資本主義の打倒は暴力革命によって実現されなければいけないというこの二つのことしか言わなかった。そういう面白い人がいてもいいんですけど、そういう人が5%近い得票を得たというんです。それはフランスではちょっとしたニュースだったんです。いったい誰がこの人に入れたのっていう、その後でいろんな分析があって、そうしたら圧倒的に田舎の農民票だったわけです。別に農民達が暴力革命をやるかと思っているかどうかの問題ではなくて、自分達の入る候補がいなかったわけです。ただ、その人達というのは、フランスではローカルな社会をきちっと作っていくという、そういう活動をしている人達です。その人たちの一種の抵抗運動みたいなのが極左のおばさんに票を集めたという、そういう感じのようなんです。

だから、今回も極左の人がどのくらい取るかというのは、ちょっと面白いことではあるんですけど。そういうようなことも、混乱しながらもろんな分解が進んで、その中には新しい時代を作る面もあるし、うっかりすると非常に困った時代に





向かって行くというその動きもあるし、今はそういう時代だというふうに思うしかないという気がしています。

僕の話はそれぐらいにして、あと少し討論ができればと思っています。どうもありがとうございます。

(司会)

内山先生ありがとうございました。沢山のいろんな考えるキーワードが出てきたと思います。時間がまだ若干ございますので質疑があればお手を上げていただいて、できれば所属と名前をおっしゃっていただいて質問の方を受けたいと思います。質問のある方はどうぞ挙手をお願いします。

(会場)

レジュメにあるシステム依存型の生き方から、ローカルな生きる世界を再建するというところに興味を引かれまして、実は僕自身もつい2週間前に京都から高知に引っ越して来まして、会社を辞めて移住してきました。まさにローカリズムみたいな力を、まさに今日感じる出来事があって、近くの商店街で桜餅の5個入りのやつを買ったら、何かおまけででっかい大根4本を付けてくれたという、桜餅が300円だったんですけどその倍以上するであろう大根を付けてくれたという、何かそういうお金の等価交換を超越した何ていうか関係しているのが地方にあるのかなと思いました。それで内山さんも群馬県にお住まいとのことで、地方で暮らすことの強みとか武器っていうのは、これからどう出てくるのかというのを、ちょっとお伺いしたいです。

(内山氏)

レジュメのこの部分はあまりよく話をしなかったんですけど、資本主義が形成されてからいろんな批判がありました。例えば、労働者の低賃金問題もあったし、それから児童労働の問題もあったし、後は衛生的ではない工場の問題とか、いろんなことがあったし、労働の阻害とかそういうものもあったしと。いずれも正しいし、また今日でも完全に解決したわけではないそういう問題なんで

すけど、今日になってくると、もう一個、もっと大きな問題が出てきちゃったという感じなんです。それは何かと言うと、資本主義の時代がいろんなシステムを完全に作りあげたと。そのために人間の生き方はシステムの中でポジションを取るという生き方に変ったということなんです。

だから、例えば高校へ行ったり大学へ行ったりするのもそうですけど、ポジションを取るために何とか高校とか大学というポジションを取ることになっちゃう。それで今度就職するってことになる、またポジションを取るために就職をする。上手く就職できたとしても、またその中でポジションを取るという、最終的には安定した老後というポジションを取る必要があって、ですから、ポジションを取っているうちに一生が終わってしまうという、そういう生き方になっちゃったと。ところがポジションをみんなが取ろうとする時代というのは、一番困るのはシステムが変更されることなんです。

例えば、高知市で一番受験のレベルが高い高校がどこか僕は知りませんが、その高校にポジションを取るために入った。そうしたら、入ったら直ぐにそのシステムが崩壊しちゃって、卒業する時には高知で最下位の高校になってしまったと。もしそういうことがあったら非常に困るわけです。だから結局、ポジションをみんなが取れる時代というのは、システムは変わってもらっては困るという保守主義を生んだってことなんです。

だから今の日本もそうなんですけど、例えば、



「原発賛成ですか」と言うと反対の人の方が多い。あるいは「9条改正いいですか」と聞くと「しない方がいい」と言う人の方が多いとか、だけど全体として「今の内閣は支持しますか」と言うと支持率が高いわけです。だから結局それは個別の問題だと自分の意見はあるんだけど、全体としての在り方は今までのままいてほしいという、その保守主義っていいですか。もちろん世論調査というのは昼間家にいる人の世論調査なんで、全員の世論調査ではないんですけど、やっぱりポジションを絶えず取りながら生きてきた人達っていうのにとってみると、システムは変わってもらっては困るわけです。微調整ぐらいはいいですけど。大きく変わってもらっては困る、そういう時代を作っちゃったという、だからそれが人間の生き方にまでなったという、この辺りが資本主義が今になってみると、作りあげたものだったなという気がしてくるといいますか。だけどその生き方に面白くないと思う人達といえますか、だから登場してくるわけです。その生き方に面白くない人達はシステムに依存するのではなくて、自分たちの力で生きる世界を作ろうとする。その時にやることはいろいろあってもいいんですけど、自分たちで生きる世界を作ろうとすると、作れる場所は何処にあるかということになってくると、一つは農山村地域とか漁村とかです。そういう地域になるし、それから都市部だったとしても東京とか大阪ではなくて、むしろ地方都市と呼んでいるような場所です。だからそういう所の方が自分で生き方を作ろうみたいになっている人たちから見ると、フロンティアになってきたという、それが変化としてあるという感じです。

だから以前ですと、例えば農山村に引っ越しますという、農業やるんですかとか、林業やるんですかという感じだったんですけど、今、農山村とかに引っ越して来る人達ってもっと多様な仕事をやっていて、IT系の人結構多いし、デザイナー系も多いし、結構いろいろです。だから、農山村に来る人達というのは農業で収入を得ようと思わなくても農的生活がしたい、多少野菜ぐらい作りながら暮らしたいという人が多いんだけど、それもまた自分の生きる世界は自分達で作った

いということなわけです。だから、段々今の雰囲気になってくると、システムに乗っかって生きようとする人たちは、「どうぞ大都市で」と。それは嫌って人達はいろんな地域に散っていくという、そういう時代を作ってるんだろなという気がしています。だから、僕の村はもう既に人口の20%強ぐらいが、いわゆるIターン者で、最終的には5割ぐらいになるんじゃないのかという気がしています。だけど、うちの村1,300人しかいないから260何人かIターンで来た家族を含めてですけど、いるんですけど、その内で農業・林業をやっている人は30人ぐらいかなって感じですよ。後はもういろんな仕事に就いています。だから、本当に地域を作っていくにはいろんな仕事があるわけで、そのいろんな仕事が上手く絡み合っただけで元気な地域ができる。そうすると例えば、多分高知市にもあるんでしょうけど、シャッターの降りた店とか、あれまた一つのフロンティアで上手く交渉して開けることに成功すれば、かなり東京なんかと比べたら凄く安い家賃で繁華街に自分の拠点が作れるという、そういうようなことをやっている人達もいるしと。だから、これもまた本当に分解の時代なんです。片方はやはり何とかシステムにしがみつこうとする、だけど片方ではそこから出ようとするっていうそういう分解がこれから進んでいくだろうしというふうに思っています。

(司会)

よろしいでしょうか。では、他に質問のある方いらっしゃいませんか。今日は昨年よりもかなり来場者の方が多いですが、いかがですか。

(会場)

上手く言えないんですけども、先生のお話、今あるシステムから抜け出た行き方を模索しようとする人達、私もとても興味深くお話をお聞きしました。片方にはこれほど格差が大きい社会を作りあげてしまった集団主義の構造、やっぱりこの経済システムは何処まで行ってもお金を儲ける、利潤を得るということになると思うんですが、この新たな生き方を模索する人達がこの資本主義経済、お金を中心にしたこの経済の中へどれだけ入

っていつ、この不平等な社会を変えていくことが何処までできるんだろうかという疑問をもちました。

(内山氏)

今は非正規雇用が多かったりするこの現実っていうのは明らかに不当なんで、ですから、「人を雇う以上はまともに雇いなさい」ということはやっぱり言わなきゃいけない。またブラック企業みたいな企業が現実には多いですから、やっぱりそういうことに対してちゃんと声を上げていかなくちゃいけないという、それは一つあるんです。ところがもう一つにおいて、「じゃあまともに雇われたいですか」というもう一つの問いがあります。というのは、さっき言ったようにドンドン変わってきていて、例えば工場なんかでも一番面白そうな部分が機械化されていて、どうでもいいとは言わないけれど、つまり、誰でもできる所に人間が配置されている、そういうことが進行しちゃうわけです。ですから、そういう中で働いていて仮に安定が手に入ったとして、「それ幸せにするんですか」という問いかけというのは、やっぱり同時にいるっていいです。

だから変革期っていうのは、僕らの発言っていうのは一つでは絶対駄目なんです。片方においては現実にはいろんな問題がありますから、だからそこで、例えば「雇うならちゃんと雇いなさい」ということを、やっぱりいろんな形で主張し続ける。けどもう一方において、「じゃあ資本主義の基に雇われたら万々歳なんですか」という、その問いもまた必要になる。この二つは統一できません。だから両方言う必要があるってことです。だから、憲法9条もそうだけど、僕も一応その点では護憲派なんですけど、一応憲法9条守りましょうねとも一応言っているわけです。だけど憲法9条守るか、条文が残ればいいのかというと、もう全然駄目な状況のわけです。だけどやっぱり片方で憲法9条残しましょうと主張していて、だけど根本的には単に9条の問題ではなくて、やっぱり国家の問題とか資本主義の問題とかです。それが故に経済的な対立が起きて、軍事的な対立に発展するとか、そういうようなことの在り方を根本か

ら問い直すということが、やっぱり必要なわけです。

だからその両方を主張する必要があるということです。だから今の時代というのは本当に異なるふたつのこと。だから教育なんかでもそうだと思いますけど、学校で「もうちょっとちゃんとした教育をやってね」という主張はいいと。今回の今ニュースになっているように、凄まじく素晴らしい教育をしようとしている学校も生まれそうぐらい、そういう中で「もうちょっとちゃんと教育基本法の精神ぐらい守ってね」という、それは主張していいと。だけどやっぱりその一方において、教育って何だったんだろうかです。それから子供が大人になっていくという過程で、本当はどういうことが必要だったんだろうかとかです。やっぱり、ひょっとしたらそれは学校教育じゃないのかもしれないというふうな、そういう根本的な問いもいるわけです。だからその矛盾した二つの問いかけみたいなものを同時にやっていかないと、片方だけ言っていると原理主義になっちゃうし、片方だけ言っていると現実に対応するだけになっちゃうというわけです。そういう時代を今、私達は迎えているっていう気がしています。

それから今のシステムから出ようとしている人達でも、いきなり100%出ようとしているわけじゃないわけです。例えば、お金を使った経済から出ようと、気持ちとしては出れたらいいというのがあったとしても、これがいきなりリタイアしますといったって出ようがない。だからそういう中で何は出ることができるのかっていうようなこ





とを少しずつ少しずつ積み上げていることだと思うんです。ただ実際にその辺でも本当に僕の若いころとは随分状況が変わっていて、僕なんかやっぱり高度成長期の世代ですから、今年はテレビが買えたと、来年は冷蔵庫が買えそうだなみたいなそういう世代なわけです。だけど今の人達そういうことにあまり、必要な物は買うにしても関心がないし、むしろ今の人達って大きな冷蔵庫を持たなくても暮らせるような生活の知恵と生活の技を持ちたいわけです。むしろそういう人達が増えてきたということです。

実は僕はある時に教えていた大学院の学生さんが女性だけど、冷蔵庫が無いっていうわけです。「それで夏なんかどうするの？だってバターなんてベトベトになっちゃうし」、そうしたら「冷蔵庫を持たないで暮らせる技が私の誇りです」って言うんです。そういう話になって、その時にどういうやり方をしているのかいろいろ教えてもらいました。だからそれは冷蔵庫の問題だけじゃなくて、いろんなことを彼女はやっていて、まさにさっきのお話じゃないですけど、買い物もスーパーには絶対行かないで町の商店に行く。そこで買い物をしながらやっていると。どういうふうな楽しい生活があるかとか随分話してもらいましたが。そのスキルみたいなものが自分のプライドといますか、大きな冷蔵庫があったりするような生活というのは、実は「スキルがありません」と言ってるようなもので、それは本当は恥ずかしいことなんですというのが彼女の言い分です。だから、そういう人達も出てくるわけです。だけど、その人だって今のシステムから100%出ているわけではないといえますか。やっぱり電気は使っているし、別に電気を使っちゃいけないってわけでもないし。ただ、自分達は今どこへ向かおうとしているのかということを感じながらそこに向かって少しずついろんなものを変えていくわけです。そんなことだと思えばいいんじゃないかと思いません。

(司会)

よろしいでしょうか。もうお一人いらっしゃいましたら、すみません簡潔にお願いいたします。

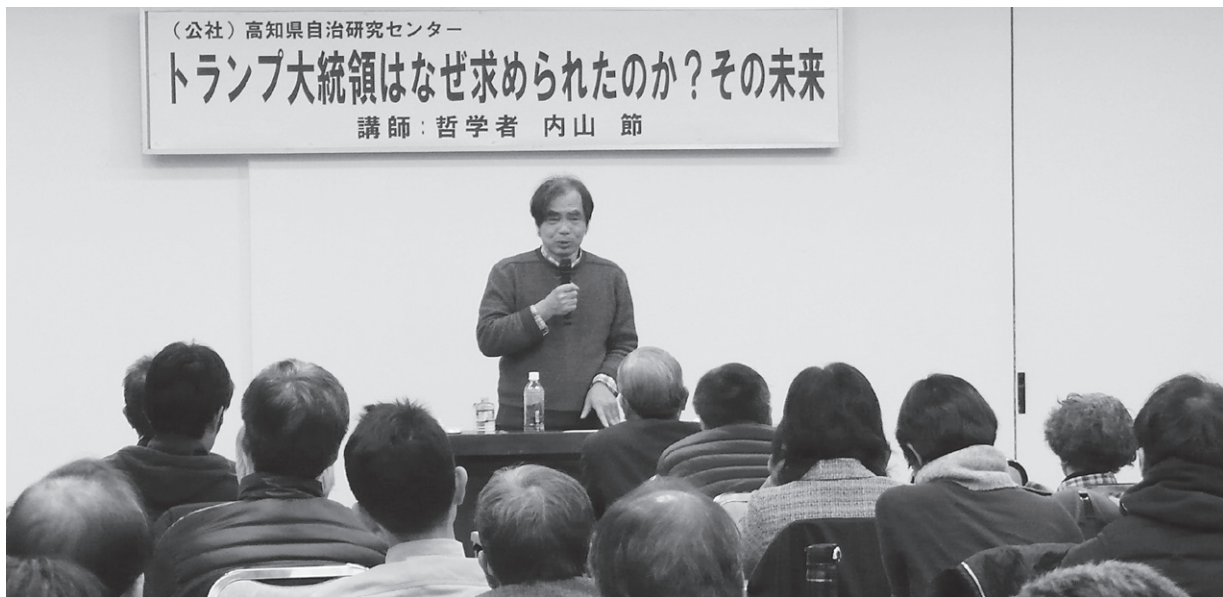


(会場)

いろいろ変わっていくというお話よく分かりました。それに自分が付いていけないというのを感じています。自分の認知能力だとか適応力がついていけなくなるんじゃないか、今も付いていけないんじゃないかというのを感じています。どうすればいいですかね。

(内山氏)

多分人間は一人で、個人になってしまうと多分付いていけないんですね。社会の変化というのはそういうもんで一人になってしまえば、全ての世界の動きを判断して、国内の動きを判断して、あらゆるシステムをよく調べて、それで自分は何をやるべきか、ここまで能力を持った人なんかいませんよということです。結局人間の能力というのは、結び合っているからこそある。だから、例えばさっき言ったような新しい動きをしている人達だって、一人で孤独にやっているわけではなくて、そういう仲間を持ち始めている、あるいは持っている。あるいはそれを応援してくれるような地域の商店のおばさんでもいいんですけど、そういうつながりを持っている。だからこそ、そういうつながりを通してこうしたらいいんだとか、今までの在り方はこんなふうにはまらなかったんだとかいうことが自然に分かるということです。だから例えば、自然に対してもそうですけど、ちょっと今、私達は自然との付き合いが鈍くなっていますと、これから私はどうしたらいいんでしょうなん



て言われたら、何にも言うことができないわけです。だけどその場合、自然と実際に付き合い始めると、あるいは自分が直接じゃなくても農家と付き合い合ったりとか、そういうことでもいいわけですけど、そういうふう付き合い合っていくと、やっぱり人間は自然とこんな関係を結ばなきゃ駄目だとか、そういうことが自然に分かってきます。だから、これも自然とのつながりができた時に分かり始めるっていう、だから全て人間の能力って個人が形成しているのではなくて、そういうつながり合う中で個人の能力も形成されていくということなんです。だから、いろんなつながり方、ちょっと自分で気が向きそうなつながり方があったらそこに加わってみるとか、そういうようなことの積み上げ

みたいなものが、その人を強くしていくということではないかなという気がしています。

(司会)

ありがとうございました。国家がたそがれを迎えている中で、いろいろその中で生きていくのも大変ですけれども、しかしトランプ大統領というような人が現れたらこそ、私達の今のこの国や社会の問題がより見えやすくなってきたのかなという気もします。最後の方からは本当にこれからの希望がもてるようなお話もいただきました。今日お話いただいた内山先生に盛大な拍手でお礼に代えたいとおもいます。大変ありがとうございました。